

要である。

七、新地區の境界は一定の計畫に基き、所々に街路で之を横斷せしめる。

八、家屋の建設は街路に近接するを許さぬ。少くとも同じ高さで隔離しあるを要する。

九、前項と同じく隣接家屋との間隔を規正するを要する。

一〇、公園、庭園、芝地、スポーツ場、花壇等は一旦には町村の野菜園に轉用する。

一一、原則として建物の後方に廣大なる空地を挿入せよ。

一二、市内地にある廣大な空地域は常時陸軍に委託して其の使用を隨意とせよ。

一三、都市の外には原則として廣大な地域として空地をつくりおき戦時の用に供せよ。

一四、火災等の偶然の原因で舊い建物が破れて都市内部に空地が出来るときは此に新建築を禁じて市立の野菜園等にすゐる。

一五、櫛比輻輳の地區は舊い家を除去し街路を新設せよ。

一六、國家重要な諸官衙は市の何れの部分にも集中してはならぬ、むしろ極端の分割主義をとれ。

一七、官廳は大なる單一家屋を作つてはならぬ、むしろ小さい分散式にせよ。

一八、特種の規正的設備、幾何學的の形を排斥する、線形を不明瞭にして空中よりの望見を困難ならしめよ。

一九、新設都市の地域は深くて四角のある低地は避けむしろ

やゝ高くて附近への平原へ下り坂のある地を可とする、森林と水面地に近い方がよい。

二〇、都市の擴張もしくは新設計畫を決定するには常に斯道の學者、軍部代表者の參與を必要とする。

こゝいつたいろ／＼の意見は露國の「ゴジエリニコフ」氏の提言である。將來の空中戦を眼前にして我國の都市はどうであらうか、識者の參考を要する點であらうと思ふ。(F)

新著紹介

○地理學通論

第一冊

理學博士高橋純一著 四六倍判

本文二五五頁 昭和二年三月 東京隆文館發行 定價四圓

高橋博士の地文地理集成は地文學の好き参考書であつたが之を改訂されたものゝ第一冊が本書である。地理學に對する基礎知識に重きを置き、且つ稍高級な新知識を包含して地理學最近の傾向を示し、以て受験者の所要を満たすと共に地理教育者の伴侶たらしめんとしたものである。第一冊は星學地理、天體としての地球及び氣圈地理の三編より成り、地理學に必要な天文學、地球物理學の一部及氣象學を説明してゐる。この第一冊は未だ地文學中の本體に説き進んで居ない爲めに地理學研究の原則だとされる因果の原則や連關の原則が見出される様な説述はなくて一般の叙述が多い。一二の目に立つ誤植？(例へばド・ラ・アランシュの様な)の外極めて誤植の少ないのは初學者に取つて幸なことである。参考文書の

指摘がなく、説明を補ふ附録の部分が本冊中に綴込まれてゐないなどは不便な點であるが、さうさう小やかましい注文には應ぜられないのが本邦學術書の常套である以上止むを得ない。とは言へ本書は邦文・地文學書中の白眉であることに間違ひはないと信ずる。地學愛好者は本書を座右にして、其の内容の豊富と装幀の高雅とに誇衿を感じないものはないであらう。(N)

○大日本方言地圖

東條操著 地圖七九釐×八九釐(縮尺約百七十二萬分ノ一) 説明書菊版五八

國語の方言區劃

頁 昭和二年三月 東京育英書院發行

定價壹圓三拾錢(地圖のみ一圓)

日本の方言地圖のなかつたのは日本地理學上遺憾なことであつた。言語學者でない我々は日本の方言分布を地圖上に表はすことが出来るかどうかと云ふことも危ぶんで居つた。今や多年方言の研究に従事して居られた著者のこの圖を得て喜びを感じるのである。方言の分括には音韻、語法及單語の三方面によらなければならないが、この原則から著者は朝鮮北海道、樺太及臺灣を除いた日本の方言區劃を次の如くにした。

一、内地方言

本州方言

- | | |
|---------|-----------|
| 本州東部方言區 | 1 東北地方 |
| 本州中部方言區 | 2 關東地方 |
| 本州西部方言區 | 3 東海・東山地方 |
| | 4 北陸地方 |
| | 5 近畿地方 |
| | 6 瀬戸内海地方 |

九州方言區

二、琉球方言區

- | | |
|---------|---------|
| 14 先島地方 | 87 雲伯地方 |
| 13 沖縄地方 | 88 土佐地方 |
| 12 薩南地方 | 9 豐日地方 |
| 11 薩隅地方 | 10 肥筑地方 |

この表を圖上に表はしたものが大日本方言地圖で、色彩によつて琉球、九州、本州三部の五方言區を區別して表はし、以下の十四の小方言地方は赤色の界線と數字とを以て表はしてある。此の外唐津と延岡との二つの言語の島(Grachinsal)は赤小圈を以て示して居る。方言の地區は方言發達の先後を表はしたものの様で琉球方言は最も古く古代日本語と古代琉球語との祖語から分れたものゝ傳へられたものであり、九州方言は之に次ぎ室町時代の末期の言葉を残したものである。猶ほ封建制度の結果小方言圈を作つたものが今日の區劃の基礎をなしてゐるとも見られる。爲に方言地方の區劃は一般に國界に沿うものであるが又必ずしも然らずして幾分の出入も認められる。なほ大體から云つて本州四國は越中・飛騨・美濃・三河の東境に沿うた境界線を以て東西の二大區に分けられる。これは親不知から日本アルプスを通じ鳥居峠を經て木曾山脈を過ぎ今切に到る交通の障害から起つたものであるが之を表はすべく圖上には東經百三十八度の西に接して子午線と平行

な赤線を入れてある。

解説書は簡短ではあるが方言研究に關するあらゆる事項にわたつて記述してあつてこの研究の入門書とも云へる。(N)

○水 納富重雄著 四六版本文四四〇頁 昭和二年六月 三省堂發行 定價二圓

水に關する天然現象を主とし、之に人間生活に關係ある水に就いての事項を通俗的に説明した地文學的、理學的著述である。まづ天空の水滴として雲を説き、地上へ落ちて來るに至つて雨となり、雨と同族の霧霞露霜虹、光環、暈を述べ、雨水の固化した雪、萬年雪、氷河、氷山、流水と説き進んで遂に天然水と人造水に及んでゐる。地表水の流動時代では川を、地表水の休養時代では湖沼を地文人文の方面に亙つて説明して居る。雨水の潜行時代として地下水の地質學的條件を基として湧水井水を説き、人間の日常生活に必要な水質淨化の事に説き及ぼして保土ヶ谷液だとかグラリリットだとかの使用の重要なことを説いてゐる。尋いでば岩漿水、鐵泉、溫泉、上水、下水、運河を述べ、一轉して人體中や植物體中の水分を説き、礦物體を廻る水として各種の礦床を記述し遂に海の諸現象に及んで居る。全卷を通じて天然現象を説明するに人事に比喻を用ひすぎてゐる位である。各種地文現象の實例として支那や蒙古やの我々に目新しいものを用ひ然かも眞實で掲げてあるのはうれしい。然し日本の例になると地名の怪

しいものがちよい／＼見受けられるのは惜しい。例へば播磨の帝釋だとか、京都智恩院の雪羽瀧だとかである。又數葉の寫眞版はどれも鮮かである。たゞ朝鮮叢石亭の玄武岩の節理の寫眞を花崗岩の海金剛と誤つて後章にもこの誤りを繰り返して居るなどは甚しく目ざはりである。著者の様な多年地質調査所の技師として、支那と云はず日本の各所を研究された然かも人間生活に深い憧憬をもたれる人の筆であるが爲に興味の湧くを禁ぜない間に水の地文人文を知らぬ間に會得して了はれるが喜ばしい。本書は一般教養ある人士の讀物に適すると共に地文學の一部の良參考書である。(N)

○日本國勢圖會 矢野恒太編 昭和二年八月、日本評論社發行 定價八十錢

菊版三百二十四頁の中冊子である。編者は第一生命保險相互會社の社長で、數年前から愛國の情熱しがたく、本書の出版を計畫して愈今年に出版された。これから毎年引つゞいて新しい統計材料によつて三版、四版と出てゆくであらうとの事である。本書章を分つこと八十五章、地球と人類から書き初めて、生活資料に入り經濟地理を講ずること凡そ六十章邦人に必要な農業家畜、漁業、鐵業、電氣、瓦斯、紡績、織物、製紙、硝子、ゴマ、燐寸、酒茶、珈琲、コ、ア、烟草、工業原料等が有力な統計によつて解説し、進んで人口政策、通信、鐵道、船舶等の交通地理をとぎ、金融保險、通貨、爲

替、物價等一般商業の概念を明にし、轉じて思想から宗教、衛生に及び、日本の財政經濟を詳にして更らに國際上の日本の位置を明にしてある。統計表二三一、圖表一三五、いかにも「日本經濟圖會」たるの名に背かない。戰後好況の夢漸く醒めて、日本の將來を想見するの時、既に武藤山治氏の實業政治、下村宏氏の財政讀本などが出て、農村青年の歡迎をうけたことであるが、穗積博士の民法讀本などのやうな政治上の常識を與へる目的のものと、併せて本書のごときは政治經濟地理の常識を天下に普及せしめんとする絶好の著述で將に双壁であるといつてよい。蓋し一般世人の歡迎をうくるであらう。教育家や地理學者の手によつてこうした書物が出て然るべきと思ふが、さうした人の書籍はつい學究的になりやすい、こゝに於てか有力にして國を憂うる實業家や政治家が民衆讀本としての出版によつて、極めて容易に國民の常識を高めるの道に出たと見て敬意を表する。予は如斯き正確な統計をもつて、かくまで明白に國勢を眼前に描出した著者の勞苦を多とすると同時に、日本の政治家や學者たちもこれを一讀して啓蒙の途に出でられんことを望み、この書の大に天下に廣布せんことを祈るものである。(藤田)

○地理教材研究第十輯

東京目黒書店

昭和二年六月發行

定價二圓三十錢

本輯の口給に慶長十四年の出雲大社の町の圖が出てゐる。これは餘程珍しい古地圖でこれによつて杵築の現在とを比

較し得らるゝが、特に面白いのは町家でもこの附近現今の農村同様になれ生駒をもつてあることである。最近に聚落研究といふことが流行して各方面に論議されるやうになつたが本輯には大根島や、横牛盆地の聚落研究のある外に西龜正夫氏の九州地方聚落瞥見記がでゝある、中に有明灣の周圍にあるグド作りの説明が面白い。平入と妻入がいづれが古いかと云ふ論は、恐らく妻入が古いのであらう事は、筆者も同感であるが、九州南部から四國、紀州のハイランドには、古くから平入があつて、妻入の形勢をうけてゐないらしい痕跡がある。この點は更らに多くの報告をうけ調査をしてみたいと思ふ西龜氏の研究を頻はしたい。帷子氏のアフリカ地體、石原氏の日本地質學の進歩いづれも有益の文字で、國館のヤマセ(東偏風)の研究の如きは地方的に面白いものであると信する。其他九州方面の都市の研究が多い。卷末に一輯以來の總目錄をつけてある。蓋しこの研究の發刊以來滿五年をへて將に成人期に達したことを語るものである。菊版三〇三頁、いづりながら西田君の勞を多とする。(藤田)

雜報

○奄美大島の貝類

今夏 聖上陛下奄美大島に行幸あらせらるるを機とし鹿兒島縣では豫て 陛下が博物學に御造詣深く御熱心であらせられると云ふことから御歡迎の一として大島に於ける各種天産物の狀態を天覽に供することにした。